

～第17回阿蘇カルデラスーパーマラソン大会～

100kmウルトラマラソン

(熊本県阿蘇市)

2006年 6月3日

～大会の特徴～

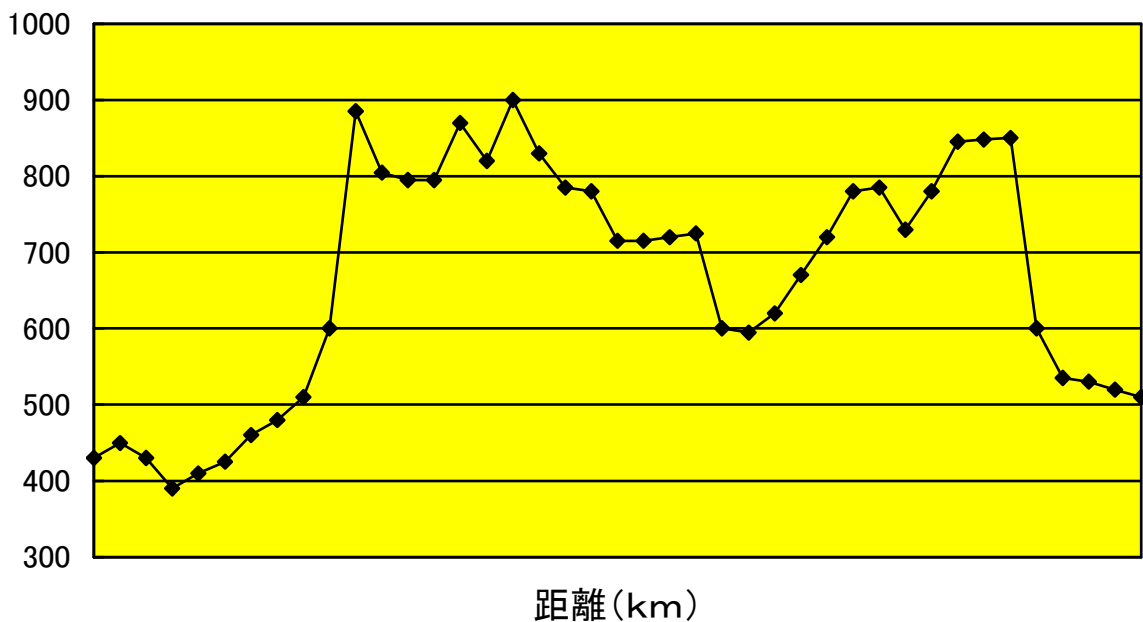
緑一色に染まった雄大な大草原阿蘇、全国にも誇れる大自然をバックに、アップダウン
厳しい険峻なコースを走り抜ける。全国レベルの知名度を誇るウルトラとしては、九州唯
一のせいか、九州の参加者が8割以上を占めている。また3回以上参加している九州人が
多く、九州に密着した大会と感じた。

～コース～

下図のとおり、大きなアップダウンあり、細かいアップダウンあり、ウルトラ屈指の難
コースの1つ。最高峰の野辺山の次に厳しいという噂である。

標高(m)

コース高低図



～大会2週間前から前日まで～

○GW中(4/29～5/7)

- ・練習内容：起伏あるコースでのLSD。68km走、83km走、高尾山40km走各1回。
- ・目的：脚筋力強化
- ・調子：GW後半は朝から重い足、ウルトラの後半戦を考え、我慢してLSDを続ける。

○5/14

- ・大会：鹿沼さつきマラソン（ハーフ）
- ・それまでの1週間：軽いジョグ（疲労回復のため）と、1～2キロのペース走。
- ・ハーフ出場の目的：やや長い距離のスピードレースをすることで、呼吸器官に刺激を与え、スピード持久力に対する恐怖感を取り除く。

○5/15～5/28

- ・練習内容：平日週2回は、タフネスコース15キロか、帰宅ラン25キロ。週末はタフネスコースLSD。その他、疲労が貯まっているときはジョグ、それなりの体調の時は、9割程度のスピードで呼吸器官に刺激。
- ・目的：阿蘇のアップダウン対策とスタミナ作り。

○レース4、5日前

- ・練習内容：軽いジョグ
- ・目的：足に貯まった疲労を少しずつ回復させる。
- ・結果：なかなか抜けなかった。

○レース3日前

- ・マッサージ：行きつけのウェルケアで30分。（1ヶ月前から予定していた）
- ・効果：相当足が軽くなった

○レース2日前

- ・カプセルホテル宿。水風呂と温かい風呂を交互に入り、体を柔らかくする。
- ・効果：バッチリ。

○レース前日

- ・飛行機で熊本へ。
- ・体調：バッチリ。カプセル銭湯のお陰で、足は動いていた。

～開催状況～

天候：晴れ
参加人数：約600人
スタート：5：00
気温：25度は超えていたらしい。

～ユニフォーム～

半袖の速乾性Tシャツ（前半：黄色、後半：グレーと黒）、下は緑の半スパッツ。サングラスと帽子着用。

～今回の目標～

12時間以内での完走

○スタート～10km

スタートしてすぐに上り坂。でも足は快調に動いている。よし調整はうまくいったんだ。焦らず、慌てず、何度か手をぶらりと下げてリラックス。暫くすると下りに入り、あっという間に2.5km。何と1km6分を遥かに切るペースで来ている。そんなに飛ばしている感じはない。このペースで暫く押していくか。田畑に囲まれた狭い県道を黙々と走る雰囲気は、北海道とどこか似ている。しかし、早朝なのに全く寒さを感じさせない。走りながら感じる温かな風が、「阿蘇を走っている」という実感を起こさせていた。

そして7kmを過ぎた辺りから、阿蘇の山々が遠くに見え出した。その山並みと僕の間には、見渡す限り田畑ばかり。快調、快調、でも20kmを過ぎた後にくる急坂と、後半戦を考えると、気を抜くことは出来なかった。元来僕は少し緊張した方が力を発揮できる性格だ。不器用でセンスに乏しいせい、リラックスした瞬間に結果が急降下することが多かった。体はリラックス、心は少し緊張。我ながら良い精神状態で走っている。この調子で暫く行きたいなあ。

さあ10km地点、庁舎前にやってくると今日初めての大きなエイド。後半に備えてバナナを補給。仮設トイレで用を足すと、早速に走り出す。何と1時間01分。トイレでのロスがかなりあったのに、相当早いペースだ。1km5分50秒くらいで来ている。いい感じだ。

○10km～20km

絶好調とは言えないけど、調子は良い方だ。遠くにそびえ立つ阿蘇の山並みを見ながら、細い県道をくねくね曲がりながらひた走る。このペースが体にしみこんできた。良くなっていくのを感じながら、ゆっくりと旅をするように…。そして17km過ぎから広い道路に合流、チラシには10～20kmで100m以上上ることになっていたが、全く上りとは思えなかった。

しかし、田畑ばかりだった30分前とは雰囲気が違う。正面に森の緑が見えてきた。あそこに噂の「走ってはいけない上り坂」があるのか。たった2.5kmで360mも上るのだ。遂に近づいてきたか…。快調な足で進む心地よさと、急坂を迎え撃つ前の緊張感が入り混じる。

そして20kmエイド。「もうすぐ上り坂ですよ」というスタッフの声が、やけに心に響いた。2時間02分、20km通過。

○20km～30km

暫くは緩やかな上りを快調に走り続けたが、10分もたっただろうか。「来たあ！」噂通り、もの凄い上り坂である。前を見渡すとみんな歩いている。上りに自信があった僕は走ってみるが、やはり足は重たい。「去年優勝した人も、ここは歩いてた」という話を

聞き、少し安心。しかし、前には1人だけ走っているランナーがいる。それを見ると、「よし俺も！」苦しくなることを知りながら走り続け、22.5kmを過ぎた辺りから歩きに切り替えた。実際歩いてペースはそれほど変わらない。まだ足にも疲労感はなく、しっかりと前に進んでいる。

いやあ、それにしても素晴らしい大草原だ。どこを見ても緑ばかり。その草原には数頭の牛達が放牧されている。厳しい上り坂ではあるが、暫くして後ろを振り返ると、緑一色の大草原と、挟まれた細道をコツコツと歩き続けるランナーの列、左手には相変わらず続く阿蘇の山並み。つい30分前は、やや首を上にして見ていた山並みを、今は下に見ている。そんな光景を目にすると、「確かに上ってきたんだ」という達成感に心は溢れてしまう。いやあ、きつかった。でも素晴らしい道だった！

そして25kmを過ぎると一転して下り坂。今度は左右大きな木々に囲まれての下り坂が続く。急な下りだったため走りづらい。後半また急な上りがやってくる。ここは飛ばしすぎてはいけない。あまり快調とは感じなかったが、調子もまあまあ良い方だ。何も考えず、マイペースで下り続けた。3時間07分、30km通過。

○30km～40km

ここから40kmまで、100m上ることを聞いていた。でも、全然上りとは感じない。むしろ下り坂が多いような感じさえする。何も考えなくても、体が1km6分を刻んでくれている。このペースで行ってみよう。何故だか分からないけれど、この10kmは全く景色を覚えていない。とにかく淡々と走り続けたことしか記憶にない。

40km、4時間08分通過。

○40km～50km

かなり急な下り坂。この辺も殆ど覚えていない。でもどの辺りだったか、阿蘇スポーツセンターと、その周辺に見えたメチャクチャ広い芝生がもの凄い開放感を与えた。暫く木々の中を走り続けた後、ハゲ山のような下り坂、そして見えてきたただっ広い緑だけに、やけに印象に残った。下りが続き、少しずつ足が重くなっていくのが分かる。それでも時々来る応援に手を振りながら、ゆっくりと下り続ける。

そして10時過ぎ、下り切ると久々に賑やかな場所が変わった。多くの方が拍手で出迎える。ここは50km地点、レストステーションであった。5時間10分、ちょうど半分が終わった。黄色のシャツから、黒とクレーのシャツに替える。下は相変わらず緑色。青山学院のスクールカラーだ。

エイドにあったおにぎりを4個、更にバナナを大量に口に入れた。今日は早朝5時スタート、お腹がすいていた。増してや60kmを過ぎてから厳しい上り坂が待っている。ここで補給しないと上れないだろう。更にみかんと食塩も口に。覚悟していた腹痛を処理すると、ゆっくりと歩き出す。そして5分ほど経った後走り出した。

ここまで5時間24分。着替え・給食・体操・トイレすべてやった割には、ロスは意外に少ない。よし12時間切り行けそうな気がしてきた。後半も急な上りが続くだけに、僕の走力では大きなペースダウンは否めない。ここを5時間30分以内で通過することは絶

対条件だった。よしもう一度気を引き締めよう。

○50km～60km

やはり少し苦しくなってきた。後半戦という距離よりも、暫く下り坂を走ったことで、膝に疲労が貯まっていた。ここは我慢のしどころ。ここで我慢すれば、このペースに体が馴染んで来るだろう。まだ1km6分強のペースで来ている。息も荒れてきて、歩きたい気持ちが何度も起きてくる。最大の分かれ目と踏んでいた波野支所前5時間30分をクリアしたことで、心に中だるみが生じてしまった。何だか走る気が起きてこない。でもここまで来たら12時間切りをやりたい。あわよくば、11時間40分切り（1km7分ペースで11時間40分）もやってみたい。「歩きたい」でも、「僅かの差で目標タイムを逃したら悔いが残る」との想いが走らせ続ける。

○60km～70km

ここでは阿蘇の山並みは目に映らない。空き地の中をひた走ったかと思えば、高木に挟まれた道へと変化、そうかと思うと左右共に田畑ばかりの道に変わりもする。時々民家が見え、ポツンポツンと応援の人が声をかけてくれる。途中から左下に綺麗な清流が見えてきた。そのせせらぎを耳にしながら、僅かずつ上り続けるこの雰囲気は、どこか野辺山と似ているような気がする。あの時も50kmから55kmがこんな風景だった。あの時と同じだ。野辺山を走っている錯覚に陥りながら、重たくなった足を前に進める。

しかし、大小のアップダウンを繰り返してきた体は、思うように動いてくれない。増してや今日は30度近い暑さに見舞われ、ちょうどお昼時の今、一番苦しい時間帯か。50kmで4個もおにぎりを食べているのに、お腹がすいてきた。ドリンクをとっても、暑さですぐに吸収してしまう。更に悪いことに、左足の脛の部分に痛みが生じてきた。でもウルトラでは、痛みが生じることは必ず起こる。大丈夫、気にするな。それよりもお腹がすき出したことがまずい。次のおにぎりは75km地点までない。何とかしなければ。

そして65km過ぎ、自動販売機が見えてきた。「よし、ここで炭酸飲料だ！これで75kmまで持たせよう。良かった！」しかし、ウェストポーチを開けてショック！何と財布が入っていない。あった物は胃薬とバツファリンだけ。マジかよっ…。ショックを忘れるために、走り出す。しかし、体に力が入らなくなってきた。とにかく75kmまでは、バナナで我慢するしかない。走ったり、歩いたり…。

暫く歩くと、後ろから大きな声が飛んできた。「さあ、70kmまでゆっくり走りましょう！」その声に触発されて2人組と共に走り出した。「70km過ぎたら凄い上り坂！そこは歩いて同じだから、そこまで頑張ろう！」一人は地元熊本の方だった。体も大きい、声もドでかい。そのパワーに元気を貰い、足が動き出した。

「熊本ですか！？」「いや、東京です！」「東京から！？走るために熊本まで！バカですね！」自分でも半分バカと思っていたから、反論のしようがない。しかし、続けざまにもっとバカな話を聞かされた。「2週間前に東京ドーム初めて行ったんですけど、デカイですね。ソフトバンク戦が手に入ったんで、仕事終わってから、飛行機で飛んで行きましたよ。ずっとビール飲みながら、楽しかったですね。」それこそ、バカじゃないですか。

このバカ同士の会話(?)のお陰で元気が出た。あつという間に70km地点がやってきた。「よし70km来たぜ!あと30km!」3人揃って前へ前への感覚になってきた。空腹感も忘れていた。脛の痛みも忘れていた。

○70km~80km

前に行くランナーを少しずつ吸収しながらひた走る。4人、5人、6人…集団走になってきた。思えば、話しながら走ったのは今回初めてだ。こんなに元気を貰えるものなのか。改めて人の有難みを強く感じる。メンバーが増えていくたびに元気になる。そして、72km辺りのエイドにようやくやってきた。「いやあこのエイド区間は長かった。」ほぼ全員から共通語が飛び交った。水をたっぷり膝にかけて、大量のバナナと塩分を口にする。ここには宿で相部屋だった、福岡の荒瀬さんもいた。

このエイドの直後に厳しい上り坂が始まった。くねくねした道ではない。ほぼ一直線の上り坂。前はみんな歩いている。荒瀬さんも含めて、7~8人の集団で歩き続ける。ここはもう完全に歩きモードだ。熊本の三浦さんが所属するクラブの抜き打ちエイドに会い、スイカと水分を頂く。美味しかった。一番暑い時だけに、本当に有難かった。再びみんなと共にスタート、そして上り坂を終えると同時に走り出した。「美味しいビール飲みましょう」そう誓い合って荒瀬さんと別れ、前に向かった。みんなゆっくりしたペースで行ったが、12時間切りにこだわりがあった僕はペースを上げた。そして75km、待ちに待ったおにぎりに辿りついた。

これで暫く持ちそうだ。しかし当然前半のように動かない。水分と同様、食べてもすぐに吸収してしまう。それでも1km6分強のペースで来ていることを確認し、安心感を得る。相変わらず野辺山と似た雰囲気の中を、我慢、我慢…。そしてダラダラした上り坂の途中で、遂に80km!

○80km~90km

ここから凄まじい上り坂が始まった。こんな所走れる訳がない。わずか2kmで130mの上り坂。20km過ぎでは2.5kmで360m上ったが、80kmを過ぎてからの急な上りは、本当にしんどい。真夏のような炎天下の中を、早歩きで上り続ける。ここに来て、野辺山と似た環境にはおさらば。歩いている所は右も左も緑一色、まさに阿蘇の大草原であった。

疲労もピークに達していた。でも12時間を切るためには、走らねばならない。上り坂を終えた83kmから走り出す。エイドで水を大量にぶっかけ、おにぎりも大量に口にする。そして暫く歩いた後に走り出す。足の疲労もさることながら、胃袋も普通ではない。走りながら少し気持ち悪い。それはそうだ。おにぎりを沢山食べて、時間が経たないうちに暑い中を走っているのだから。でも、食べないと体が持ちそうにない。

本当にきつい!85kmの標示を見ても、「15kmも残っている」という気持ちが先に出る。まだまだゴールは遠い先のように感じた。完走の喜びを味わえるのはいつになるのか?本当にその時はくるのか?タイムに余裕があるのに、そんな錯覚にさえ陥ってしまします。それでも12時間切りというこだわりが、「走る」本能を生み出し、苦しくても足を

止めずに進ませ続ける。

それでも、これだけ苦しくても、無駄なことを考えずに無我夢中になれる。その源はやはり阿蘇の大自然であった。チラシには、「苦しいけど眺めは絶景」そんなフレーズがこの区間に書かれていた。まさにそのとおりであった。何せ右も左も鮮やかな緑一色。どこまでも緑一色。いや緑というより、黄緑という表現の方が適切だ。他に見えるものは何一つない。遮る物がない6月の太陽が、鮮やかな黄緑色を更に光輝くように映し出す。そこに生きる数頭の牛達の姿。

これが阿蘇の大自然だ！苦しい中でも心からの開放感を与え、前に進ませ続ける。この仕掛けこそ、阿蘇カルデラスーパーマラソンだったのか。

そして、87.5kmの標示を見ると同時に下り坂に変わった。黄緑色に輝く大草原の中をひたすらに下った。いやあ、本当に素晴らしい。こんなに続く大草原は、見たことがない。足も呼吸も苦しいけど、眺めは本当に素晴らしい。そして暫く下ると、黄緑一色だった遙か前方に、阿蘇の町並みが映ってきた。左右は大草原の黄緑一色、遠方には阿蘇の町並み。「下りてきた！ゴールが近づいてきた！」

○90km～ゴール

あと10kmの標識を見る。ここから再び大きな木々の中のコースに変わった。何とこの下りが厳しかったことか、上りよりも厳しかった。もう少しペースアップできると思ったが、全くできない。むしろペースダウンしていたかもしれない。ここまで来たら12時間を切りたい。気持ち切らさなければ十分いける。あわよくば11時間40分切りでゴールしたい。

そして93kmエイドまで来た。もう完全に下り切った。本当に苦しかった。しかし、前方には更に苦しそうな道が見えていた。何と見渡す限り田畑だけ。2km以上この田畑しかない細道を行くらしい。マジかよっ！。5分ほど歩いた後走りに切り替えた。もう完全に足は棒になっていた。体全体が動かなくなっていた。息も荒れていた。もう我慢するしかない。

やっとのことでこの一本道に別れを告げて95km。エイドを終え、50mほど行った所で右折。その時ふと後ろを見ると、何とレモン色のユニフォームが見えていた。相部屋の荒瀬さんである。すぐ後ろを走っていたのである。「同じ実力の人には負けたくない」元来の負けず嫌いな性分が出てしまった。自分にセンスがないことは分かっているけど、人間味溢れるウルトラをやり続けても、いまだ大人になり切れない。苦しかったが、ペースを上げた。しかし体は全く言うことを聞かず、息もすぐに荒れてしまう。厳しい、これは抜かれるのも時間の問題だ。一瞬諦めて歩き出す。でも少し経つと、諦め切れずに走り出す。一度勝田マラソンで、最後の100mを流したところ、ゴール手前で知り合いに抜かれた、あの時のショッキングな気持ちがまだ頭にあった。ここまで来たら、力の限り逃げてみたい。動かぬ体を無理矢理前に進めた。

これが功を奏したか、残り2.5kmの標示を見てからは早かった。すぐにあと2km、あと1.5km、あと1kmとやってきた。相変わらず体はきついままだったが、最後の3kmは自分でも驚くほど粘れた。何と1km5分で行っていた。

残り1kmから応援の人が増えていった。手を叩いて「100kmお疲れ様」「あとちょっと」後ろを見ると誰の姿も見えていない。ビクトリーロードに変わった。最後はいい感触で終わりたい。もう余裕で12時間を切れるタイムなのに、更にペースを上げた。

帰ってきた、阿蘇の中心街に帰ってきた。昨日来た見覚えのある場所に帰ってきた。もうゴールは目の前だ。応援の数が多くなった。大きな拍手。更にアナウンスの声が聞こえてきた。「続いてゼッケン130番の石村さん、東京から来ました！」最後のカーブを右に曲がると、さあゴールが目に入った！両脇の大きな歓声に手を振りながら、いざゴールへ！ポーズははじめから決めていた。3度目の100km完走を示す3本指。1本、2本、3本ゴールイ～ン！バンザ～イ！完走メダルを手に入れた。

～阿蘇の大自然～

11時間36分17秒のロード無事終わる

○ゴールの後

相部屋の荒瀬さんがすぐにゴールするだろう。芝生に座って待っていた。ところが、3分後に現れたのは荒瀬さんではなかった。何と70km手前で元気を分けてくれた2人であった。地元熊本の三浦さんともう一方。82kmの上り坂では、遥か下の方に見えていたのに…。こんなに追い上げられていたとは、気づかなかった。向こうは意識していなかっただろうが、凄い底力だ！そして更にその5分後、荒瀬さんもゴールにやってきた！4人揃って最高の握手。バンザ～イ、バンザ～イ、バンザ～イ！

最高だあ！

○会場に温泉あり

総合センターの中に温泉がある。これもこの大会の魅力であった。早速向かった。当然込み合っているが、気持ち良かった！最高の一時であった。

○完走パーティー

野外で完走パーティーが開かれるのも、素晴らしいセッティングだ。飲み物2本無料で配られる。当然ビールである。サブ12時間と自己ベスト1時間更新というおまけ付きまで得ただけに、最高のビールとなった。荒瀬さんと、同じく相部屋だった宮崎の高藤さんとも合流できた。抽選会での当りを秘かに期待しながら、ビールが進んだ。更には大盤振る舞いの荒瀬さんが九州の芋焼酎を買っていた。更に熊本の地酒も。そして荒瀬さんの仲間が加わり、完全に酒盛りになった。良い結果で気も大きくなったのだろう。ペースが早かった。終わった頃には、相当のハイテンションになって、宿に戻った。

でもまだ酔わないうちに、熊本の三浦さんに会うことが出来た。思えば最初の苦しみを味わい出した時、ドデカイ声とバカ会話(?)で元気を頂き、そこで空腹感を忘れた。そ

こから80kmまで1km6分強のペースを維持できた。まさに神様のような存在だった。それなのに、途中から遙か前方に逃げてしまった点は申し訳ないが、走る以上は誰もが素晴らしき走友であるのと共に、戦友でもある。お許し願いたい。「是非また熊本まで来てください」何気ないこの一言が、いつまでも心に残った。今度東京ドームに来られる時は、是非声をかけて頂きたい。

○宿でもう一杯

九州の芋焼酎を持ち込んで夕食。話が弾んだ。相当テンションが高かったと思うが、話の内容はよく覚えている。本当に楽しかった。

○良かった点

- ・起伏走LSDを続けて、脚筋力を強化した。
- ・3日前のマッサージ。やはり好きなことに対しては、ケチはいらない。
- ・カプセルホテルで行った水風呂と温かい風呂の往復。
- ・ウルトラ用のシューズが合っていた。(SAROMA)
- ・作戦の成功。50km地点5時間30分以内と初めから決めてかかった。
- ・残り5kmからも続いた緊張感。苦しい中、ここでペースアップできた。
- ・塩分を早くからとっておいた。

○悪かった点

- ・呼吸器官の弱さ。4月半ばまで故障上がりだったため、インターバル走を行っていなかった。そのため、早くから息は荒れていた。次の100kmは、スピード持久力を鍛えてから出て、11時間切りを狙いたい。
- ・50kmの後に来た中だるみ。レストステーション5時間30分ばかりに気持ちがいつていた。その直後にたるみやすいことを忘れていた。
- ・80km過ぎの上りと下りをなめていた。奥武蔵で40kmで800m上ったから大丈夫と思った。しかし、終盤のアップダウンの厳しさは予想を遥かに超えていた。なめていた分、心の準備が出来ていなかった。

○そして翌日

酒のおかげで、朝起きると頭ガンガン。先行き怪しかったが、胃薬とバッファリンで何とか回復。宿の内牧温泉で休んだ後、観光に向かった。阿蘇山頂上までバス、カルデラを見た後、今度は列車の旅。日本一長い駅名が阿蘇にあると聞いていた。せっかくだから行ってみよう。「南阿蘇水の生まれる里白水高原」誰も降りる人はいなかった。帰りの電車を待つ間も人影なし。仕方ないから、駅の看板だけ写真を撮るにとどまった。

熊本に戻ると、三角線で天草に近い宇土市内へ。もっといろんな所に行きたかったが、時間なし。最後に熊本ラーメンを食べて、飛行機に乗った。

○九州への憧れ

もう15年前に遡る。中学生の頃から、九州という土地に何気ない憧れを持っていた。小さい頃から大の野球好き、当然野球部に入った。更に1年生の終わり頃長距離に出会う。部活は野球部、それ以外の時間は陸上だけの生活を続けていた。当時この2つは九州が本当に強かった。今でこそ、東北・北海道勢が甲子園を沸かすようになったが、当時は東北の学校が九州に勝つなど、記憶に残るほど珍しかった。

そして中学2年の秋から、野球バカだった僕の心が陸上に移り始め、冬にはほぼ長距離一色に変わっていた。長距離は本当に九州が強かった。当時黄金時代にあった旭化成も九州だ。宗兄弟も九州の出身だ。メチャクチャ尊敬し、応援していた谷口浩美さんも九州だ。当時大ヒットしていた松野明美さんも九州。松野人気で全国的な知名度となったニコニコドーも九州であった。高校駅伝も強かった。大牟田高校、福岡大大塚、九州国際大付属、筑紫女学園、諫早高校、熊本工業、九州学院、鎮西高校、信愛女学院、小林高校、鹿児島実業…次々と名前が思い浮かんでくる。

速くもないくせに長距離一色だった僕にとって、陸上が強い土地柄九州は憧れの的地であった。両親共に青森の出身、何故か友人の両親も北国の出身が多かった。九州は全く縁のない土地だった。そんな縁のなさがまた、「行ってみたい」という気持ちを高ぶらせた。

高校に入るとその陸上が、大きな挫折を生み出し、練習に身が入らない時もあった。それでも「長距離が大好き」という気持ちは冷めることなく、九州への憧れは強まるばかりだった。九州がテレビに映ると、バカの一つ覚えのように、内容も頭にインプットされていた。

しかし実際に足を踏み入れたのは、社会人7年目、宮崎の青島フルで行ったのが初めてだった。既に30歳になっていた。大学に入り、長距離と無縁な生活となるに連れ、九州への憧れは冷めていった。そして、再び走る熱を取り戻したきっかけはTRNAS・YEZO。舞台は反対方向の北海道であった。

しかし、そんな中でも九州人にほぼ共通する一つの特徴は感じ続けた。「私は九州の出身です」と言う。県名ではなく、「九州」というのである。九州人は、九州と一塊に捉える傾向が強い。学生時代に会った九州の友人からそう聞いたことがある。

今回この大会に参加して、それを更に強く感じた。3年連続の阿蘇、7度目の阿蘇という方を沢山聞くのである。「この大会は年中行事として欠かせない」宿ではそんな方が多かった。現にパンフレットを見ても、8割は九州だった。どこに行っても、その近辺が多いことには変わらない。でも丹後半島も、四万十川も全国から散らばっていた。これほど近隣からの参加が多い大きな大会も珍しい。九州人が、九州という土地に抱く誇りの表れかもしれない。特にウルトラ好みは、僕より数段年配の方が多い。ちょうど九州の陸上が強かった頃、今の僕の年齢だった。やはりランニングの盛んな土地柄なのではないか？特に九州唯一の知名度の高いこのウルトラは、九州人の憧れの的地であり、年中行事として、心を支え続ける大会なのだろう。

たった2日間の九州人だったけど、その土地の匂いを十二分に満喫した旅であった。

○宇土市内ぶらり旅

熊本駅から約30分、天草に近い網田駅で降りてみた。駅員一人しかいない小さな、小さな駅だった。僕の他に降りた客はいただろうか…。

ここはかつて、世界へ羽ばたくランナーとして期待された石坂雅美選手の出身地だった。高校時代それほど知名度のなかった石坂選手が頭角を現したのは、東農短大に入って1年目の記録会だった。当時僕は中学2年生、あの松野明美が大ヒットしていた頃である。松野に追いつけ追い越せで、多くの選手が育ち、誰が勝ってもおかしくない。女子10000mは、マラソン以上に注目を浴びた花形レースだった。

そんな中で石坂選手の話は、松野と共通点が多いことだった。同じ熊本の出身、小さな体での懸命な走り、前半から果敢にトップを突っ走っていく積極性…。2人の初対決は翌年の日本選手権、その時は松野が貫禄を見せて、ぶっちぎりの優勝を果たした。しかし石坂も2位に入り、2人揃ってアジア大会への切符を手に入れた。

アジア大会では、直前の故障で力を出し切れずに終わったが、将来を嘱望されて三田工業に入社した。しかし、そこから泣かず飛ばずの日々が続いた。1年目は相次ぐ故障で伸び悩む。更に2年目、オリンピックをかけた日本選手権も故障で欠場、冬の実業団駅伝は区間28位の大ブレーキ。次々と有力選手が10000mのトップクラスに名乗りを挙げ、レベルが急速に高まっていく中、影の薄い存在になってしまった。しかし3年目に復活の兆しが見え始める。短大時代に近いタイムでトラックレースを走っていた。日本選手権も10位前後に終わったが、ハイレベルに急成長した10000mでの結果。前年の大不振を考えれば、復活に向け大きな一歩を踏み出したと思われた。

スピードより距離に自信があるという話も聞いていた。だからこそ、いつかはマラソンで復活して、世界に羽ばたいていくだろうと信じていた。しかし勝負の世界は厳しかったようだ。その後また極度の不振が続いた。冬の実業団駅伝でも結果を出せず、当時のダイナミックな走りは、全く影を潜めた。その後レースにすら出なくなった。そして10月遂に三田工業を退社、現役生活にピリオドを打った。24歳あまりにも早すぎる引退だった。

失礼な話だが、脚光を浴びはじめた当時、僕は石坂選手には全く注目していなかった。「積極的なランナーだな」そんな印象しかなかった。しかし陸上雑誌のトップアスリートデータバンクに取り上げられた時、そこでの一言が大きく心に響いた。「陸上だけでなく、視野の広い大きな選手になりたいです。」将来の夢といえば、「オリンピックでメダルを…」。「日の丸を背負って…」という言葉を使うアスリートが殆どであった。それだけに、その新鮮かつ人間味溢れるその言葉には、大きく心を動かされた。更には、高校時代に上下関係が厳しかったことから、初めて陸上部を作る大学を選び、家事・炊事も後輩と共同分担している点など…。ピストルと同時に鬼のような形相でトップを突っ走っていく姿からは、想像もつかない優しさが印象に残ったデータバンクだった。

当時中学生だった僕は野球部に所属、下手なくせに誰よりも熱心で、やりたがり屋だった。だからこそ、先輩からの風当たりは、他のどの部員よりも強かった。次期エースを目指して投球練習をすると、必ず大きな罵声が響いた。与えられる役割は、常に雑用係のリーダーだった。引き継いだ時に与えられた勲章は、「史上発のベンチキャプテン」。

そして翌年、キャプテンに就任すると、自身が最も苦しめられた上下関係の改善に取り

組んだ。それが同級生との諍いを招いた。さらにエース争いをめぐって、ライバルとグラ
ンドの外、教室の中、修学旅行の最中でたびたび口論した。いや口論というよりは、とこ
とんまで短所を見つけての冷やかashi合いであった。当然好きでやっていたことではないが、
相手に仕掛けられれば、負けず嫌いだった僕は黙っていられなかった。それでも、野球セ
ンスもパワーも遥かに劣っていることに、心の中では嫌というほど気づかされていた。そ
れだけに、短所の探り合いはどうしても分が悪く、最後の手段は相手の服をつかみ、暴力
事件寸前で周囲にやっとなめられる始末であった。今振り返れば、グラウンドの中では宿命
のライバル、外では最高の仲間として生きる集団に飢え続けていた頃だった。それだけに、
フィールドでのやんちゃな走り、外での人間らしさを併せ持つ石坂選手は尊敬に値する
ランナーとなった。

本気で応援し出したのは、三田工業に入社して2年目、大不振が続いていた頃だった。
僕自身高校に入ると挫折ばかりの陸上生活が続き出した。丸10ヶ月間も足を止めてしま
った。しかし2年生の9月に、勝負だけではない陸上競技の持つ楽しさも覚え、再びこの
世界に復活、駄馬でも楽しく自分を追い込める、新たな陸上競技を手に入れた時だった。
あまりにも次元が違うため、失礼な話になってしまうが、同じ時期に長期間泥沼に陥って
いた石坂選手に、頑張るって欲しい気持ちは強かった。この時、応援の手紙まで出していた。
すると信じられないことに、本人から返事が届いた。さすがに驚いた。更には1年後、復
活を期待するレポートを陸上雑誌の会社に投稿し、採用された。

そして高校生活を終えた頃、同じように石坂選手を応援する、世代を超えた数人の知り
合いに出会った。奇しくも自分と同じように、陸上競技で大きな挫折を味わったメンバー
だった。中には夢追いかけて、陸上の名門校に進みながら、アトピー性皮膚炎という難病
にかかり、陸上生活を断念。走れない体に大きなコンプレックスを味わい、長いトンネル
を経ながら、大学に入った後別な夢を持って前進しはじめた先輩も居た。同じ時期に、長
い暗闇に入っていた選手を応援する気持ちは同じだった。今度は復活を願う応援手紙を全
員で出した。すると再び返事が返ってきた。

小さい頃から僕は、思いついたら多少恥ずかしいことでも、人目隠さずに実行してしま
う性格。元気で目立ちたがり屋だった割には、文章を書くことも好きだった。小学生の頃
に友人と共に出したプロ野球選手へのファンレターを皮切りに、感動を味わうとすぐにペ
ンを執った。野球、サッカー、陸上と、個人・学校を問わず5回ほど出していた。また陸
上雑誌にも数回投稿していた。箱根駅伝、マラソン、高校駅伝…。しかし、本当に返事が
来たのは、後にも先にも石坂選手だけだった。

そして浪人時代の12月、急に手紙が送られて来た時は驚いた。しかし封を開けると、
「現役引退」というあまりにも残念な内容だった。かつてない限界を感じて以来、1年間
苦しみ抜いた胸の内が書かれていた。「陸上で結果を残せなかった分、看護婦として病め
る多くの人々の命を救い、自分が世の中にとって必要な存在となれるように、それにより
支えてくれた多くの方に恩返しをしていきたい…」あの果敢な走り、人間味を併せ持つ
石坂選手らしい文章だった…。今思えば、あの果敢な走りは、自分らしい陸上競技を追い
求めた気持ちの現れだったのかも知れない。勝負師とはおよそ離れた性格に、人間として
の強さと共に、アスリートとしての弱さがあったのかもしれない。とはいえ、勝つことば

かりに執着し、それが元凶で大きなトンネルに陥ってしまった僕に与えてくれたことは、本当に多かった。

その後陸上とは無縁の生活を送り出した僕は、暫くの間スポーツ界で尊敬する選手さえも見つけられなかった。それはそうだろう。自らもランニングに冷めていたのだから。でも市民ランナーとして復活以来、再び多くの「尊敬するスポーツ選手」が現れるようになった。それでも何気ない熊本への興味は薄れ、今回も47都道府県の1つの大会という気持ちしかなかった。でも、熊本駅で何気なく路線図を見ると、「二度と来られないかもしれない、行ってみよう。」に変わった。

そんな気持ちを起こさせたのは、単に石坂選手の出身地というだけではなかった。本人が出た網田中学校には、熊本県陸上界で有名な指導者がいた。石坂選手もその先生の下で陸上に出会い、育っていった。スパルタ指導でならしたらしい。現に全国中学駅伝が始まると、その網田中学校が熊本の代表になっていた。ところが、別な中学校に転勤すると、その中学校が県代表を勝ち取るようになっていた。更には1月の京都を走る、都道府県対抗駅伝の熊本チームの監督まで何度も務めていた。その網田中学校が高台にそびえていた。

その静かな町、宇土市網田を散歩しながら、昨年5月に友人と飲んだ時の話を思い出した。「自分の尊敬する選手」について。こんなことを言う方はたくさんいる。「中学・高校時代は無名だったけど、コツコツ頑張って遅咲きで結果を出した選手」しかし、僕の場合は少し違う。「早くから結果を出しながら、ドン底に落ち、それでももう一度復活してきた選手」

早い段階で結果を出せば、その時は確かに嬉しい。でも素質があれば、早い段階から結果を出すのは当然のことである。また才能は小さくても、早い段階からスパルタ指導を受け、血をはうような努力をすれば、結果がついてくるのも当然である。しかし、素質がありながらそこそこの努力で終わっていた選手が、後から本気で努力し出せば、抜かれていく話もある意味当然なのである。その時の挫折は、計り知れない。早い段階で抜き返せばダメージは小さい。しかし、ケガや病気が長く続けば、トンネルは深まる一方だ。そこから再起を期し、本当に戻ってくるには、相当の精神力を要することだと思う。

過去にも中学・高校時代に華やかな実績を残しながら、相次ぐ故障に苦しみ、競技の世界から離れていった選手を何人も見てきた。そんな選手は今頃何をしているのだろう。僕が言う「復活」は、その世界における過去の輝かしいレベルへの復活だけではない。たとえ別世界であっても、その挫折で得た自分にしかない経験を糧に、ほんの少しでも世の中に対して貢献していく「人間としての復活」であればいいと思う。やはり人間を動かすのは一にも二にも心である。その心を動かすのは何よりも実体験であるに違いない。

いつどこで、何が起きるか分からないのが人生だ。そこで得た経験をどう生かすかは自分次第。僕も将来は、自身を支え、変え続けたランニングで、世の中に貢献できる人間になりたいと思っている。それがいつになるかは分からないけれど…、そのいつかがクセ者かもしれないけれど…、一度きりしかない自分の人生、本能のままに生きていきたい。多くの方にランニングの楽しさを伝えたい。網田の町を散歩し、無人駅で列車を待ちながら、そんな想いに久しぶりに浸っていた。

待っていた阿蘇のゴールは、自らの未来。新たな夢に向かい、今再スタート…。